

Title	アリストテレス『倫理学』における自足性と友の必要性の問題： EE.VII12とEN.IX9の比較を通じて
Sub Title	The problem of self-sufficient man and his friends in Aristotle's ethical writings : a comparison of EE.VII12 and EN.IX9
Author	牛田, 徳子(Ushida, Noriko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.43- 62
JaLC DOI	
Abstract	Why does a self-sufficient, virtuous man need friends? This paper tries to elucidate the difference between the Eudemian Ethics VII12 and the Nicomachean Ethics IX9, both concerning with that problem. In EE a friend, being another self, means one's resemblance. He is desirable and needed insofar as he is the object one knows and, thus, he contributes to one's self-knowing, which is the ultimate end. In EN a friend, being another self, means a person to whom one stands in the same relation as to oneself. He is desirable and needed as far as it is so, or nearly so, pleasant to perceive his well-being as it is to perceive one's own well-being. EE opposes its argument to an aporetic claim: friends are not needed since a self-sufficient man is likened to God. If this claim is true, EE argues, then a good man will know nothing whereas God knows nothing else than himself, for cognitive nature of human being cannot attain to self-knowledge without having known other things than itself, since it is 'potential'. The argument above is not found in EN. The reason, we suppose, is that the writer of EN will take the position to liken man's contemplative activity to God's one in his famous last book X.
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレス『倫理学』における
自足性と友の必要性の問題

—EE. VII12 と EN. IX9 の比較を通じて—

—牛 田 徳 子*

**The problem of self-sufficient man and his friends
in Aristotle's ethical writings**

—a comparison of EE.VII12 and EN. IX9—

Noriko Ushida

Why does a self-sufficient, virtuous man need friends? This paper tries to elucidate the difference between the *Eudemian Ethics* VII12 and the *Nicomachean Ethics* IX9, both concerning with that problem.

In EE a friend, being another self, means one's resemblance. He is desirable and needed insofar as he is the object one knows and, thus, he contributes to one's self-knowing, which is the ultimate end. In EN a friend, being another self, means a person to whom one stands in the same relation as to oneself. He is desirable and needed as far as it is so, or nearly so, pleasant to perceive his well-being as it is to perceive one's own well-being.

EE opposes its argument to an aporetic claim: friends are not needed since a self-sufficient man is likened to God. If this claim is true, EE argues, then a good man will know *nothing* whereas God knows *nothing else than himself*, for cognitive nature of human being cannot attain to self-knowledge without having known other things than itself, since it is 'potential'. The argument above is not found in EN. The reason, we suppose, is that the writer of EN will take the position to liken man's contemplative activity to God's one in his famous last book X.

* 慶應義塾大学言語文化研究所教授 (哲学)

はじめに

アリストテレスの倫理思想において「自足であること」は人間の幸福の重要な指標である。『ニコマコス倫理学』でアリストテレスは、自足なもの (*τὸ αὐτάρκες*) とは「それがあるだけで、生を望ましく、なにも欠くることのないものにするもの」と述べ、「幸福はそういうものだといわれわれは考える」と語っている (EN.I7, 1097b14-16)。ところで自足する人間はひとりだけの生を享受する人間を意味しない、というのが彼の一般的な見解であったと言ってよい⁽¹⁾。しかしなぜそうでなければならないのか、という問いが当然生じるであろう。アリストテレスはその問題のために、友人関係にかぎってではあるが、それぞれ『ニコマコス倫理学』(以下 EN と記す) では第 IX 巻第 9 章と、『エウデモス倫理学』(以下 EE と記す) では第 VII 巻第 12 章⁽²⁾ を費やしている。

しかしながら両書の内容にはかなりの違いがある。前以って言えば、EE の論述は、テキストがところにより判読しづらいにもかかわらず、私には EN よりもはるかに明晰で、しかも人間哲学、認識論の観点からもはるかに面白いと思われる。

私は本稿で EN と EE の年代問題やアリストテレスの倫理思想の発展問題を取り上げる意図はない⁽³⁾。ただ、EN の伝統的な著名さのために、EE があまり省みられず、ほとんど第二次資料の扱いを受けている事実を指摘する必要があると思う。ケニーの大胆な試論が現われたあとでも、その傾向は変わっていない。また、私は EE の全体が EN よりすぐれていると主張するつもりもない。本稿で取り上げるのは EE の一つの章にすぎない。しかしその内容は本論のテーマを越える重要な問題に関連してくる。私はこの EE の箇所を持つ意義を明らかにした研究を知らない⁽⁴⁾。したがってまず、冗漫になる恐れをいとわず、EE. VII12 の抄訳と、それと比較するために EN. IX9 の抄訳をそれぞれ I 節と II 節で試みることにする。そし

てIII節において両章をいくつかの点で比較検討して、その相違を明らかにし、そこから一つの教訓を引き出したい。

I. EE. VII12 (1244b1-1245b19)⁽⁵⁾

導入部 (1244b1-23)

【1】 アポリアの提出——有徳な人が幸いな人であるなら、どうして彼は友が必要だろうか。なぜなら自足な人は有用な友も楽しませてくれる友も必要としないし、また彼らと共に生きることも必要としないからである。というのは彼は自ら自分自身と共にあることで十分だからである。

それはとりわけ神の場合に明らかである。なぜなら神はなにもさらに必要としないからには、友も必要としないだろうし、そもそも神がいかなるものも必要としない以上は神に友があるはずもないことは明らかだからである (b5-10)。

【2】 反対意見——しかしもっとも幸いな人においても、友というものはただ徳のゆえに（必要で）あることは明らかだと思われよう⁽⁶⁾。なぜならなにも欠けるものがないときにこそ、われわれは皆、共に楽しもうとする人々を求め、恩恵を与えようとする人々よりもむしろ、恩恵に与かろうとする人々を求めるからである。そして欠乏の状態にあるときよりも、自足の状態にあるときにわれわれは彼らをよく識別できるし、とりわけ共に生きるにふさわしい友をこそ必要とするのである (b15-21)⁽⁷⁾。

本論——アポリアに対する反論 (1244b21-1245b19)

「かのアポリアについては、おそらく一面では正しいことを述べているが(B)、他面では(神と人との)比較のために(真実を)見落としているところがある(A)のを考察しなければならない」(b21-23)。

反論 A (1244b23-1245b11)

(a) 反論のための予備的考察

現実態(現実活動)に即し、目的の意味における「生きること」とはなにか。それは知覚し、認識することである⁽⁸⁾。——したがって「共に生きること」とは共に知覚し、共に認識することである。——ところで(目的としての)知覚することそれ自体、認識することそれ自体は各人にとってもっとも望ましいことである⁽⁹⁾。まさしくそのことのゆえに万人には生得的に生きることへの欲求がある。なぜなら生きることは一種の認識として立てられるべきだからである(b26-29)⁽¹⁰⁾。

自分自身を知覚し、認識することがいっそう望ましいのは理に適う。すなわち、理由のうちに「生きることは望ましい」と「善きことは望ましい」の二つを共に立てるべきであって、そこから「(生きるわれわれ)自身にそのような(善き)本性がそなわることは望ましい」が得られる。そこで、このような双欄表⁽¹¹⁾の一方の欄がつねに「望ましいもの」の配列のうちであり、そして一般的に言えば、認識対象も、知覚対象も⁽¹²⁾、一定の本性に与かることによって(望ましいもの)であるから、自分自身を知覚しようと欲するのは、自分自身がそのような(望ましい一定の本性の)ものであることを欲することである。もっともわれわれ(人間)がそれぞれの認識対象であることは自らによってではなく、ただ知覚し、認識することのうちに(認識対象になる)可能性に与かることによってである。つまり人が知覚し、認識することによって(自ら)知覚対象、認識対象になるというのは、前以って彼が知覚し、認識する対象によって、そのような仕方において、そのかぎりにおいてなのである⁽¹³⁾。したがって人が生きることをつねに欲するのは、認識することをつねに欲するからであり、また認識することをつねに欲するのは、自らが(自らにとっての)認

識対象であることをつねに欲するからなのである (b33-1245a10)⁽¹⁴⁾.

(b) 反論

「友」というのは「もう一人の自分」を意味する。しかし「もう一人の自分」というものはばらばらであって、そのすべてが同一人に集中するのは難しい。たしかに友は自然本性上はもっとも親縁的なものではあるが⁽¹⁵⁾、身体の上で自分と相似な友と精神の上で自分と相似な友は異なるし、また心身の部分に応じて相似な友は異なる。しかしそれでも「友」はあたかも「自分の分身」のような意味をもつ。かくして友を知覚することは或る仕方で自分を知覚し、或る仕方で自分を認識することであるのは必然である。(1245a29-37)⁽¹⁶⁾。

したがって俗なことでさえ友と共に楽しみ、共に生きるのが快いのは道理がある。なぜならそれと同時に彼を知覚することがつねに起こるからである。しかしいっそう神的な快を共にするほどいっそう快い。その原因は、いっそう善なることのうちに自分を観るほど、さらにいっそう快いからである。その（善なる）ことは場合によっては情感であったり、実践であったり、それらとは異なること（観想ないし哲学）であったりする。そして自らよく生きることが快く、友もまた同じであるなら、また共に生きることのうちに共に活動することが存するなら、友との共同性はまさしく最大に目的のうちにある。それゆえ共に観想し、共に祝うことである。（中略）各人その得ることができる目的のうちに人は友と共に生きることが欲するのである (a37-1245b9)。

かくて共に生きねばならぬこと、万人がとりわけそれを欲すること、もっとも幸いな人、最善な人がとりわけそのような（共に生きる）人であることは明らかである (b9-11)。

反論 B (1245b12-19)

しかし（アポリアの）議論によって以上とは反対のことが現われたことも、その議論が真なることを主張しているからには理由のある結果であった。つまりそれは、神と人との比較が真であるから⁽¹⁷⁾、両者の場合を一致させることによって解決をはかっているのである。すなわち、神が友を必要とするような性格のものではないことが、神と相似な人もまた友を必要としないことを当然要求するということである。

とはいえ、この議論に即して言えば、優れた人はなにも思惟しないという（奇妙な）ことになろう。なぜなら、神の善き状態はそうではなく⁽¹⁸⁾、神は彼自ら自身以外に他のどんなものも思惟するにはあまりに優れているからである⁽¹⁹⁾。その理由は、われわれ（人間）のよさはわれわれ自身とは異なるものに依拠するのに対して、かのものにおいては彼自ら彼自身のよさであることにある（b12-19）。

II. EN. IX9 (1169b3-1170b19)⁽²⁰⁾

導入部 (1169b3-22)

幸いな人について、彼が友を必要とするべきか、するべきでないかで、意見が分かれる。

【1】 不要論

至福で、自足する人々は友をまったく必要としない。なぜなら彼らには善きものがすでにそなわっている。だから自足である以上は、なにもさらに必要としない。これに対して、友は「もう一人の自分」であるなら、自分ではできないことを調達してくれる。そこから「ダイモンが恵んでくれるなら、どうして友が必要であろう」（Eurip. *Orest.* 665）と言われる（b4-8）。

【2】 必要論

- (i) 幸いな人にすべての善きものを配分しながら、外的な善の最大なものと思われる友を与えないのは奇妙にみえる（b8-10）。

(ii) よくされるよりも、よくしてやるのが友のすることであるし、恩恵を与えることが善き人や徳のすべきことであるし、無縁の人よりも友をよくしてやる方がいっそう美しいことであるなら、優れた人はよくされる者を必要とするはずである。それゆえ、不運にある者は恩恵を与えてくれる者を必要とするし、好運にある者はよくしてやる相手を必要とするのだから、不運にあるときよりも好運にあるときいっそう友を必要とするのかどうか問われさえするのである (b10-16).

(iii) 至福な人を孤独な人にするのもおそらく奇妙なことであろう。なぜならなんびとも自分一人だけの所有にしようとするすべての善きものを選び取ろうとはしないだろうからである。なぜなら人間はポリス的であって（人々と）共に生きるのが自然本来だからである。幸いな人さえも例外ではない。なぜなら彼は自然的に善きものを持っているからである。そして彼が無縁な者や行き当たりばったりの者よりも適正な友と共に過ごすのがよりよいのは明らかである。かくして幸いな人は友を必要とする (b16-22)⁽²¹⁾.

本論—第一の説（不要論）に対する反論 (1169b22-1170b19)

「第一の説を支持する人々はなにを言わんとするか、どの点において真を主張しているか。おそらく以下のことであろう。大衆は友を有用な者だと思っている。たしかに至福な人は善きものをすでにそなえているからには、そのような者をなんら必要としないはずである。またさらに、彼は楽しみのための友も、僅かの範囲しか必要としないだろう。なぜなら彼の生が（内的に）快いのであれば、外から得られる快をなんら必要としないからである。そして以上のような（有用さと楽しみのための）友を必要としないからには、彼は友を必要としないと思われる。

しかし、この説はおそらく真実ではないだろう。なぜなら——」

(b22-28)

反論(1) 幸福の概念よりする議論(1169b28-1170a12)

- (i) 幸福とは一種の現実態(現実活動)であることが初めに語られたが(cf. I8), 現実態は明らかに(うちに)生じきたるものであって, 財産のように人に所属するものではない. 幸福であることが生きること, 活動することのうちにあり, 善き人の現実態(現実活動)は初めにも述べたように(cf. I8), それ自体として優れ, 快く, また自分自身のものも快いものの一つであるが, われわれは自分自身よりも隣人を, 自分自身の実践よりも彼らの実践をいっそうよく観ることができ, 優れた人が友であるなら彼らの実践は善き人にとって快いものである.(中略)以上であるなら, いやしくも適正で, かつ自分自身のものである実践を観ることを望み, 友である善き人の実践が同じような性格のものであるかぎり, 至福な人はそのような友を必要とするはずである(b28-1170a4).
- (ii) 幸いな人が生きるのは快でなければならぬと考えられる. 孤独な者にとって生は厳しい. なぜなら自分だけで連続的に活動するのは容易でないからである. しかし他人と共に, 他人との関係において活動するのはもっと容易である. そうすれば現実活動はそれ自体快いだから, いっそう連続的になるであろう. このことこそ至福な人においてあるべきことである(1170a4-8).
- (iii) 善き人々と共に生きることによって, 徳の涵養も生まれるであろう(a11-12).

反論(2) いっそう自然学的な考察よりする議論(1170a13-b19)

(a) 反論のための予備的考察

「生きること」は動物に対しては感覚の能力によって定義され, 人間に対しては感覚と思惟の能力によって定義される. しかし能力

(可能態)は活動(現実態)に帰せられ、「生きること」の)主要な意味は活動(現実態)のうちにある。したがって「生きること」は主要な意味では感覺すること、ないし思惟することである(a16-19)。

ところで生きることは自体的に善きこと、快なることの一つである。なぜならそれは一定なことであり、一定なことは善の本性に属するからである。ところで自然的に善きことは適正な人にとっても善きことである。まさしくそのゆえに(生きることは)万人にとって快く思われるのである(a19-22)。

ところで見ている者は見ていることを知覚し、聴いている者は聴いていることを知覚し、歩いている者は歩いていることを知覚する⁽²²⁾。またその他のすべて(の活動)の場合にも同様に、われわれが活動していることを知覚することが(われわれのうちに)ある。したがってわれわれは感覺しているときは⁽²³⁾、感覺していることを知覚するし、思惟しているときは⁽²³⁾、思惟していることを知覚する。ところで感覺していること、あるいは思惟していることを知覚することは、われわれのあることを知覚することである。——なぜならあることは(定義により)感覺すること、あるいは思惟することであったからである⁽²⁴⁾。——そして生きていることを知覚することは自体的に快いものの一つである。なぜなら生は自然的に善きことであり、自分のうちに善きことがあるのを知覚するのは快いからである(a29-1170b3)。

(b) 反論

そして生きることはとりわけ善き人々にとって望ましい。というのは彼らにとってそのあること(i.e. 生きること)は善く、かつ快いから。たしかに自体的に善きことを共に知覚するならば、彼らは(共に)楽しむ。そして優れた人は自分に対すると同じような関係

を友に対して持つ⁽²⁵⁾。なぜなら友は「もう一人の自分」であるから、かくして各人にとって自らのあることが望ましいのと同じように、あるいはそれに近く、友のあることも望ましい。ところで、あることは自分が善きものであることを知覚するゆえに望ましいことであつた⁽²⁶⁾。そしてそのような知覚はそれ自体として快いものである。かくして友のあることも（自分のあることと）共に知覚すべきである。このことは共に生き、言葉と思考を共有することのうちに得られるであろう。なぜなら共に生きるということは人間たちの場合はそのような意味で言われ、家畜が同じ牧場で牧草を食むような意味ではないように思われようからである。

したがって至福なる人にとってそのあることは、自然的に善きこと、快いことであつてみれば、自体的に望ましく、また友のあることもそれに近いのであれば、友もまた望ましいものの一つであろう。ところで当人にとって望ましいものは当人にあらねばならない。さもなくば、そのかぎり、彼は欠ける者になろう (b3-18)。

かくして人が幸いであらんとするならば、彼は優れた友が必要であることになろう (b18-19)。

III. EE. VII12 と EN. IX9 の比較検討

EE. VII12 と EN. IX9 はテーマも同じなら、一見するところ議論の構成も類似である。それはまず、対立意見を提出する導入部で始まり、一方の立場（友の必用論）を支持する論証——これも二部構成である——が本論を形作る。しかしながら EE の本論構成がはるかに明確で、整合的であるのは明らかであろう。それは友の不要論を導入するアポリアに終始照準を当てつつ (1244b21-3, 1245a26-9, 1245b12-3)、まず友の必要性を論証し（反論 A）、返す刀でアポリアを論駁する（反論 B）という形を取る。ここにアリストテレスのディアレクティケーの鮮やかな見本を見ることが

できる。これに反してEEの諸議論は散漫で、内的な一貫性が乏しいことは一見してわかる。それゆえ両書の比較検討は、EEをつねに基にして、それと関連するENの箇所を参照するという方法を取ることにする⁽²⁷⁾。

議論を導入する「友の不要性」のトポスが両書において異なることはもっとも注目に値する。EEでは神のケースが比較の対象として使われる。これに対してENでは神は現われない⁽²⁸⁾。神の問題はEEが最後に取り上げる論点であるから、本稿でも最後に扱うことになる。

- (1) 人間において「生きること」は「認識すること」である (EE 反論 A (a), EN 反論 (2) (a))

この言明は *De Anima* を知る者にとってはけっして唐突なものではない。生命の内実は、植物においては栄養機能、動物においては感覚機能、人間においては知的機能であり、それぞれ後者は前者を内含する。ただここではENが明示するように、活動 (*ἐνέργεια*) の意味——EEの言葉によれば目的・終極 (*τέλος*) の意味——における「生きること」が問題にされる。自然学においては生命は生物の本質として扱われるが、倫理学においては人間が生きるべき生として扱われる。この意味での「生きること」は人間にとって自然本性上望ましい善であり、それゆえ快なることでなければならない。したがって生きることが定義により認識することであるなら、認識することもまた人間にとって自然本性上望ましく、快なることであろう。

しかしながら、認識することの望ましさの扱い方がEEとENとでは明らかに異なる。EEにおいては望ましいのは自己を認識することである。なぜならそれは、自己が可認識な一定の本性のものであることを前提し、そのような自己を自分が認識することは、認識すること自体の完結、終極目的を意味するからである。しかし人間においては認識は能力として与えられ、能力であるかぎり人間の認識的本性は不定な可能態にすぎないか

ら、そのかぎりにおいては自己認識はけっして成立しえない。そのためにはまず外的対象を認識し、その形相を受容することによって現実化され、本性の一定性を獲得する必要がある。かくして人間にとって究極的目的である自己の認識は、ただ他者を認識することを媒介として初めて達成されることになる。

他方 EN においては、望ましいのは、感覚することであれ、思惟することであれ、認識することを知覚する（あるいは意識する）ことである。なぜなら、それは生きることを知覚することと同義であり、生きること、活動することが自体的に一定の本性のものであってみれば、自らのうちにそのような善きものがあるのを知覚することは快いからである。

以上の EE と EN の主張を比較すれば、二つの論点が生じる。

- (i) 両書ともに、生きることを、認識することとして定義することから出発する。EE はその定義が及ぶ範囲のなかで議論する。認識の対象は——それが現実には他者であろうと、自己であろうと——認識の概念に含意されている。他方 EN では対象は問題にされず、「認識することを知覚する」という反省的意識が取り上げられる。それを EN は経験的事実（見ている者は見ていることを知覚する。聴いている者は聴いていることを知覚する。歩いている者は歩いていることを知覚する etc.）から帰納して、定義により「生きることを知覚する」を導出している。しかしこの種の「知覚すること」もまた生きていくこと以外のなんであろうか。もっとも認識すること、生きることの知覚も、自分が認識すること、自分が生きることの知覚であるから、一種の自己の知覚ではある。しかしそれは自己自身を認識の対象にすることまでには至っていない。
- (ii) EE の議論は一つの重要な論点を提供する。それは、人間はいかなる意味において完全に自足的でありうるか、という問題である。というのは EE の議論は、本来的に人間の認識的本性が自足的でないことを示唆しているからである。なぜならそれは自ら以外の対象を必要とし、そ

れを認識することにより充足され、一定化されるからである。それに対してENは生きること、活動することがすでに一定の本性的なものであることとみなしている。詳しくはのちに触れるように、ENの最終巻を俟たねばならない。

(2) 友のあり方 (EE 反論 A (b), EN 反論 (2) (b))

両書において友は「もう一人の自分」(*ἄλλος αὐτός, ἕτερος αὐτός*) と表わされる。EEにおいては、それは「自分と相似なもの」を意味する。そのような友もまた、必然的に認識の対象である。しかも目的の観点からすれば、いっそう望ましい対象である。人間の認識的本性にとっては路傍の石、草木、動物、さらに自分と不相似な人間を認識することも自然本来的に望ましく、したがって快いはずであるけれども、自分と多かれ少なかれ相似なものを身近に認識することは、自らが可認識になるという、認識することの目的にいっそう寄与するだろうからである⁽²⁹⁾。

ENにおいては、友が「もう一人の自分」であることは、「自分に対すると同じような関係にあるもの」を意味する。自分が生きていること、つまり自分のあることを知覚するのは望ましく、かつ快い。ところで友は自分に対すると同じような関係にあるのだから、友のあることを知覚するのも望ましく、かつ快いことである。しかるに望ましいものが自分にならば、そのがぎり自分は欠乏の状態にあることになる。したがって友はあらねばならない。

「望ましい友は欠けてはならない」。このことはEEとENの議論に共通である。しかしこの要求はEEにおいていっそう切実にみえる。なぜなら、すでに見たように、友の存在は人間の認識的本性が必要とするものに属するからである。これに対してENにおいては自らに対してあることが第一義的であり、友はそれと相似な関係にある。「各人にとって自らのあることが望ましいと同じように、あるいはそれに近く、友のあることも望

ましい」(1170b7-8), 「至福なる者にとってそのあることが自然的に善きこと, 快いことであり……友のあることもそれに近いのであれば……」(ibid. 14-16). なぜならすでに見たように, EN においては(自分が)生きることそれ自体がすでに一定な善き本性のものであるからである. それゆえ自分の生きることによって, 友の生きることによって共感(共に知覚すること)を快く覚えるということになる⁽³⁰⁾.

(3) 神との相似論 (EE 反論 B)

相似性は EE の議論において重要な鍵概念である. 一方では自分と相似な友は必要であるが, 他方では神と相似な自分は友を必要としない. この二つの相反する言明はともに真であることを主張している(前者については 1245a29, 後者については 1245b12-13; cf. 1244b22). たしかに, 自足という点で優れた人を神に比するならば, 彼が友を必要としないことは当然の理として帰結される. しかし, と EE は反論する, もしそうならば, 神が自ら自身以外には, なにも思惟しないのに対して, 優れた人はなにも思惟しないことになる. 神の最善の本性は必然的に神自らの思惟対象である. しかし人間の望ましい認識的本性は, 他の対象を認識するかぎりにおいてのみ自ら認識対象になるのであった. したがってもし人間を神に比するならば, それは彼自らの可認識性の源泉を断ち切ることになり, 彼は自らはおろか, 友を含めて他のものさえも認識できず, あたかも眠れるもののごとくになるという奇妙な結果を招来することになる. 以上がアポリアの議論の「神と人との比較のために見落としたこと」の帰結である. EE の議論は神の自足性と人間の自足性の内容が同じでないことを明示していると言える. 結果として EE は神との比較, 神との相似性を, 少なくとも直接的な仕方で行うことは不適切であることを示唆していると考えてよいであろう.

EN. IX9 にはこの種の議論はまったく現われていない. その理由を十

分に説明することはおそらく困難であろう。しかしわれわれは EN の最終巻 X7 において理性の活動である観想の自足性が強調されているのを見ることができる。

「観想活動にはまた自足と呼ばれる特徴が最大に属するであろう。というのは知恵ある人も正しい人も、その他の人々も生きるために不可欠なものを必要とするのであるが、そのような不可欠なものが十分に満たされたときでもなお、正しい人は正しい行為をなすべき相手やその行為を共にする人々を必要とするし、節制ある人も勇気ある人も、その他の（有徳な）人々のそれぞれも同様であるのに対して、知恵ある人は自ら独りあっても観想することが可能である。それは人がいっそう知恵あるほど、いっそう可能である。彼が共に活動する人々を得るならおそらくよりよいことであろう。しかしそれでも彼はもっとも自足な人である。またその観想活動そのものだけがそれ自らのゆえに愛好されると考えられるだろう。なぜならそれからは観想すること以外になにも生じないが、実践活動からは、実践以外に多かれ少なかれ得ることがあるからである」(X7, 1177a27-b4)

「観想活動からは観想すること以外になにも生じない」。観想することはまさしく自己完結的な現実活動である。EN はそれを人間の生きる営みの最大で、最終の目標として立てる。たしかに、ここには観想活動を共にする友への言及が見られる。しかしこの種の友の存在は“よりよい”のであって、たとえば正しい行為を共にする友の必要性とは同じ扱いを受けていないことは明らかである。

EN はまた、完全な幸福が観想活動であることを神の活動に比することによっても説明している。神にふさわしい実践というものはない。正しい行為、勇気ある行為、寛容な行為、節制ある行為、およそ性格的徳に基づく実践的行為はすべて神にふさわしくない。しかし神は眠れるものではなく、生き、活動しているとわれわれは考える。

「生けるものに行為することがなく、ましてや制作することがないならば、観想以外になにが残るか。したがって神の活動は、至福において卓越したものであるからには、観想活動であろう。かくて人間的な活動のうち、神の活動にもっとも親縁的な活動がもっとも幸福なものであろう……神々の生全体が至福であるのに対して、人間の生は神々のそのような活動となんらかの相似があるかぎりにおいて至福である」(X8, 1178b20-27)⁽³¹⁾

しかし私はENの高揚した口調に戸惑いを覚える。ENは神および人間の観想の自足的な営みがそれぞれどのような仕方によっているのか、なにを対象とするのか、どのような点において人間の観想活動が神の観想活動と相似でありうるのか、いっさい述べていない。ENが人間の幸福（よく生きること）の問題に最大の焦点を当てているのは明らかであるが、EEの論述を知る者にとってはENの観想の扱い方には多くの問題が残されていることもまた明らかであろう。

しかしそれは本稿の扱う問題の範囲を越える。本論の結びとしては以下のことを指摘することで十分としたい。IX9においてENの立場と相反する「友の不要論」のなかに神との比較を持ち込むことは、次巻の論述のために好ましいとはけっして言えないであろう。IX9全体を通じて感じ取られる歯切れの悪さもまた、この点にかかわっているのかもしれない。しかし私が強調したいのは、ENの有名な最終巻の幸福論はたしかに雄弁で、その真摯さにおいて人々を酔わせるものであるけれども、そのために慎重さと冷徹な分析を失うことがけっしてあってはならないということである。

注

- (1) EN.I7, 1097b8-11:「自足というのは、単独の生を生きる自分にとってだけでなく、親、子、妻、一般に友人、同胞市民にとってのことである。とい

うのは人間は自然によってポリス的だからである」, *Politica* III6, 1278b17-21:「最初の論述において (viz. I2) ……人間は自然によってポリスの動物であることも述べられた。それゆえ、相互援助をなんら必要としない人々でさえも共に生きることを欲するのである」

- (2) 実際は章の始めから 1245b19 までである。章の区切りは後世のものである。
- (3) アリストテレスの思想の発展史を論じたイエガーは、EE を比較的初期の作品、EN を成熟した後期の作品と位置付け、それがほぼ定説として確立されてきた。W. Jaeger, *Aristotle, Fundamentals of the History of his Development*, transl. Robinson, Oxford, (1934) 1948, chap.IX. これに対して最近になってケニーはEE を重視して、EN に本来属するとされてきた共通巻 (EN.V, VI, VII) はむしろEE に属するべきことを論じ、EN の年代は特定困難であって、おそらくアリストテレスのさまざまな時期の資料を収集したものであろうと推測する。A. Kenny, *The Aristotelian Ethics, a study of relationship between the Eudemian and Nicomachean Ethics of Aristotle*, Oxford, 1978.
- (4) Pace J.-C. Fraisse, 'ATTAPKEIA et ΦΙΛΙΑ en EE. VII12, 1244b1-1245b19', *Untersuchungen zur Eudemischen Ethik, Akten des 5 Symposium Aristotelicum*, Berlin, 1971, pp. 245-251; J. M. Cooper, 'Aristotle on friendship', *Essays on Aristotle's Ethics*, ed. A. Roaty, Berkley, 1980, pp. 317-340.
- (5) テキストは Rackam 版 (Loeb, 1953) による。ただ後世によるテキストの修正はできるだけ避ける。また意味を通りやすくするため括弧を補足する。
- (6) アリストテレスによれば友愛には三種類のものがある。徳のゆえのもの、有用さのゆえのもの、快楽のゆえのものである。このうち徳のゆえのものが第一義とされる (EE. VII2). Cf. EN.VIII3. 友の有無を問われる自足な人の「自足性」がなにを意味するか、EE, EN を通じてかならずしも明らかでないが、一応、生きるために不可欠な事柄はもとより、徳をもそなえている状態のことと理解しておく。
- (7) この反対意見は EN. IX9, 1169b10-16 とほぼ同じである。II. 導入部【2】必要論(ii)参照。
- (8) この命題については EN. 1170a16-19 により詳しい説明がある。II. 反論(2) いっそう自然学的な考察よりする議論(a)反論のための予備的考察参照。
- (9) Cf. *Metaph.* II, 980a21:「すべての人間は自然本性上知ることを欲する」
- (10) このパラグラフと次のパラグラフの間に(1244b29-33), 難解な文が介在している。一部の判読不能な語 (b30: καὶ μή) を除けば、およそ以下のように

読まれるだろう。

「そこでもし人が“認識すること”を切り離し、それ自体単独なもの……にするならば——しかしこうしたことは言葉に書かれた場合のように見落とされることであるが、しかし事実によって気付かれることができる——、もしそうするならば、それは自分でなくて他人が認識することとなんら変わりはないであろう。また自分でなくて他人が生きることと似たようなことであろう」

全体の趣旨は、「認識すること」には「自分が」という認識主体が含意されているということである。この議論がつぎの「自分自身を知覚し、認識すること」の議論につながってゆく。

- (11) 「双欄表」(*ουστοιχία*) はアリストテレスの著作に散見するが、とりわけここに関連するのは以下の箇所である。 *Metaph.* VII7, 1072a30-35: 「理性は思惟対象によって動かされる。双欄表の一方は自体的な思惟対象である。そしてこの欄には本質が第一のものとしてあり、しかも単純で、現実態に則してある本質が第一である……さらに善美なもの、自らのゆえに望ましいものも同じ双欄表（の一方）にある」
- (12) *γνωστόν, αἰσθητόν* をそれぞれ「認識対象」、「知覚対象」と訳したが、字義通りには「認識されうるもの」(*cognoscibile*)、「知覚されうるもの」(*perceptibile*) である。
- (13) これがアポリアの見落としとされることである。反論 B 参照。 Cf. *De Anima* III4, 429b30-430a2: 「理性は可能態においては或る意味で可知対象である。しかし思惟する以前には現実態においてなにもものでもない。それはあたかも書板になにも書かれていないような状態にある」; *ibid.* 429b5-9: 「理性は、知識を持つ者が現実態にあるものと呼ばれるような意味で、それぞれの対象になるときでも……或る意味では(まだ)可能態にある。しかしそれは、人が学習し、発見する以前にあると同じような意味ではない。そしてそのとき理性は自ら自身を思惟することが可能になる」; *Metaph.* VII7, 1072b19-21: 「理性は思惟対象に与かることによって自らを思惟する。なぜならそれは対象と接触し、それを思惟することによって可知的なもの(思惟対象)になり、その結果理性と思惟対象が同一になるからである」; *ibid.* 9, 1074b35-36: 「知識、感覚、意見、思考はつねに他のものを対象とするのであって、自身を対象とするのは副次的なことである」
- (14) このあと、反論に移るまえにもう一度賛否両論が現われている。
「共に生きることを選ぶのは或る見方をすれば、馬鹿げたようにみえるかもしれない。第一に、他の動物と共通なこと、例えば飲食を共にする

場合である。こうしたことを行うのは、もし君が言葉の場合を別にするなら、近くにしようとして、離れていようとなんの違いがあろうか。しかし言葉を共有することさえも、たまたま言葉を交わすのであれば同じようなことである。また自足な友に対しては教えることも学ぶことも不可能である。けだし学ぶとすれば、自分が然るべき（自足な）あり方をしていないし、教えるとすれば、友が然るべきあり方をしていない、しかるに相似であることが友人同士であることだからである (1245a11-18)。

しかし、明らかにわれわれは皆、善きものを、各人に与えられるかぎりの、各人にできるかぎりの最善のものを友と共にするのはいっそう快いことである。それらの善きもののうち、或る者には身体的快を共にするべく与えられ、或る者には文芸の観賞を共にするべく与えられ、或る者には哲学を共にするべく与えられる (a18-22)』

- (15) つまり、人間同士であるということ。
- (16) 「或る仕方です」というのは、「対象を認識することによって自ら認識対象になる」という仕方を意味する。したがって自分と多かれ少なかれ相似なものが「友」とであるとすれば、そのような友を認識することによって多かれ少なかれ容易に自分が認識可能になる、ということである。
- (17) つまり、もし人が自足であるなら、その点において彼を神と比較するのは正しいという主張である。
- (18) Cf. *Metaph.* VII9, 1074b17-18: 「もし神的理性がなにも思惟しないなら、どうしてそれが崇高なものでありえようか。それはあたかも眠るもののごとくにある」
- (19) Cf. *ibid.* 1074b33-34: 「神的理性がいやしくも最善のものであるならば、それは自ら自身を思惟する」
- (20) テキストは Rackam 版 (Loeb, 1934) による。
- (21) 注(1)参照。EE には人間のポリス性の観点よりする議論は見当たらない。
- (22) Cf. *De somno et vigilia* 2, 455a16-17: 「その共通な能力によって人は見ていることを知覚し、聴いていることを知覚する」; *De anima* III2, 425b12: 「われわれは見ていることを知覚し、聴いていることを知覚するのだから……」; *De sensu et sensibilibus* 7, 448a26-29.
- (23) Bywater に従ってそれぞれ *ἂν αἰσθανώμεθα, κἂν νοώμεν* を読む。
- (24) 生きるものにおいて「生きること」は、その「あること」にはほかならないが、ここでの「あること」とは、予備的考察において与えられたように現実活動としての現実態 (*De anima* の文脈においては第二の現実態) においてあることを意味する。

- (25) 友人関係についてのこの定式は EN. IX に一貫して見られる (4, 1166a30-32, 1166b28-29; 12, 1171b32-35).
- (26) Cf. supra 1170b1-3.
- (27) 私はこの方法が最善のものであるとは主張しない。たとえば EN. IX9 を作品全体から見て解釈する方法もあるだろうし、EE についても同様な方法がありうる。さらに EE から EN への移行（あるいはその逆の移行）という観点から解釈する方法も可能かもしれない。しかし私の関心は同一テーマのもとで展開される議論の哲学的内容そのものを比較検討することにある。
- (28) それに代って、「ダイモンの恵み」が諺風に引かれているが、その痕跡は EN の以下の議論に残らないから、レトリック以上のものではないであろう。Cf. *Rhetorica* II5, 1376a2-3: 「諺もまた（非技術的な）証言である」
- (29) 注(14)参照。EE は、友の不要論が一つの論拠にしている「友の相似性」を逆手に使うわけである。
- (30) EN 反論 (1) (i) もおよそ同様な議論である。しかしそこでは自分よりも友を、自分の実践よりも友の実践をいっそうよく観ることができる、と述べられている違いがある。
- (31) もっとも EN はその直後に慎重な留保をつけている。「しかし人間の身にとっては外的な生活の福祉も必要とするであろう。なぜなら人間の自然本性は観想のために自足的ではなく、その身体が健康であることや、食料、その他の配慮が与えられる必要があるからである。しかし外的善なくしては人間は至福になれないとしても、幸福になるために多大の外的善を必要とすると考えてはならない。なぜなら自足も実践も過剰なことのうちにはないからである」(1178b33-1179a4)